
2018年 菊花病院

GFJ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2018年 菊花病院

【Nコード】

N6668D

【作者名】

GFJ

【あらすじ】

10年後の日本。突然自宅で倒れた沙希の母親。救急車で運ばれた病院、それは公立病院『菊花病院』。主人公の目を通して、近い未来の日本の医療がどうなっているのか、覗いてみたいと思います。
【お知らせ】ボイスサイトオープンしました。<http://www.voiceblog.jp/kikkachichu/>

ブログ（前書き）

「2018年菊花病院・2018年地中海病院」を書籍化しました。
amazonなどオンライン書店で購入可能です。

注） 今回の書籍にはDVDは付いていません。DVD化も現在
進めていますが、画像作成に時間がかかっています。ごめんなさい。

ボイスサイトは最近更新しておりませんが、

<http://www.voiceblog.jp/kikkachichu/>

でお楽しみいただけます。

プロローグ

あなたは、10年後の日本を覗いてみたいと思いませんか？

政治、経済、教育、医療、福祉……

私には、政治や経済、教育のことは、よくわかりません。

しかし……

医療に関しては、具体的なシーンが見えてしまいます。

それは、あまりいい未来ではないのですが、あえて、あなたにご紹介したいと思います。

多くの医療従事者が感じている危機……

この物語は、決して大袈裟ではなく、むしろ、楽観的すぎる未来かもしれません。

それは、ここ5年間の医療界の変化が、我々現場の人間の危機意識をはるかに超えたスピードで進行していることから感じとることがができます。

この変化を食い止めることは可能でしょうか。それとも、このまま変化していった方がいいのでしょうか。

医療のあり方が劇的に変化して、犠牲者になるのは誰なのか。一方で、得をする人間はいないのか？ このことで巨万の富を得ることがあるとしたら、それは一体誰なのか……

さて、私たちは普段、様々な二者択一を迫られながら毎日を生きています。

10年後の日本。二者択一を迫られた主人公が、どちらを選ぶのか……

そしてその結果、どのような結末が待っているのか……

今回は、二つのシリーズ立てにしようと思っています。

そう。主人公に一つずつ選んで、二つの人生を歩んでもらいます。

それでは、早速、主人公、日野さんに一つ目の選択をして頂きますようか。

- - 注意 - -

医療現場が舞台となりますので、必然的に人の死が出てきます。苦手な方は、ご注意ください。

第1話 救急要請

2018年9月10日・・・

「母さん！ 母さん、しっかりして！！！」

大変！！

どうしよう……

それは突然だった。

台所で昼食の準備をしていた母が『吐き気がする』と流しの淵に手をついたかと思うと、突然、膝から崩れ落ちた。

慌ててその場にしゃがみこんで、母を揺する。

だらりと力の抜けた母は重かった。

「母さん！ 母さん……」

そうこうしているうちに、私の両足に何か生暖かいものが染み込んできた事に気がついた。

失禁……

母は、意識を失い、同時に失禁して床に倒れこんでいた。

大変な事態に、私の方がうろたえる。

わぁ、どうしよう。ホントにどうしよう……

足が震えてくる。

救急車……

ちょっと待って。

救急車は、5年前から有料化されていた。とりあえず3万円あれば救急車を呼ぶことができる。母をその場に置いて、財布を確認する。3万円ジャスト。

どうしよう……

母が大変な時だと言うのに、私の頭の中には、動揺する気持ちとともに、様々な思いが駆け巡る。

医療制度が大幅に替わって、以前のように簡単に救急車を呼んで救急病院へ行く、という時代は終わっていた。

救急車を呼ぶ前に、国民保険の利く病院（公立病院）へ運んでもらうか、自費診療の病院（民間病院）へ運んでもらうかを決めておかななくてはならない。

どうしよう……

神様……

この間バラエティ番組で、有名タレントが骨折で入院したときのことを面白おかしく話していたのを思い出した。

彼はギプスをはめた状態で、4日目に退院したと言っていた。本当は2週間の入院を勧められたが、早々に退院してホテルに移ったのだと言う。自費診療で病院にかかった彼は、現在400万円の治療費をローンで払っている最中なのだと、関西弁で、ベラベラ喋っていた。

「お陰で、今は毎日、朝はパンのミミでっせ。でもなあ、これ、もしもやで、もしも2週間入院しとったら、どないなつたやろなあ？ 4日で400万円でっせ。2週間やつたら一体なんぼになります？ 今度は金の心配で、胃潰瘍になりますがな。そしたら、2週間やのうて、4週間かかるかもしれんやろ。そんなもん、病院の思うツボでっせえ。ほやろ？ ほんま、えらいこっちゃで。どないしますう？」

独特のトークで笑いを取っていたが、笑い事ではない。

彼は、人気タレントだからこそ、自費診療の病院に診てもらえたのだ。

どうしよう……

動揺しながらも、妙に冷静な私がそこにいた。

母の状態は深刻だった。だから急いで治療してもらう必要がある。でも、深刻だからこそ、治療費がバカ高い値段になることも、簡単に予測できた。

母さん、貯金、いくら持ってるんだろうか。

私の貯金は75万円だ。それでも、一生懸命貯めたつもりだけれど、こんなもの、一日入院しただけで飛んでいく。

治療費、いくらになるんだろ。

骨折で、4日間で400万円かあ。ICUとか入ったら、あつという間に1,000万円とか2,000万円とかになると聞いている。どう考えても、うちにそんなに貯金があるとは考えにくい。

2年前、民間の保険に加入するかどうか話し合った時、母は言った。

「いざと言うときは、もう、諦めよう。な。保険料支払うより、毎日の生活の方がよっぽど大事。もしも、私が倒れたら、国民保険の利く病院に運んでちょうだい」

元来、元気で働き者であることだけが自慢だった母は、自分が病で倒れることなど考えていなかったのだろう。いや、余裕がなかったという方が正確かもしれない。

まさか、こんなに早く、その時が来るとは……

毎月の保険料、85,000円は、我が家では捻出するのが困難だった。いや、どこでも、そんなに簡単には払えないだろう。

保険料にはグレードにA、B、Cそれにゴールドがあつて、Aが一番安くて母の年齢だと85,000円だった。その前に、プチAというのがあるが、これは「診察のみで検査、治療費は一切出ない」タイプ。月25,000円なら払えるだろうが、そんな保険、意味があるのだろうか。それよりも、ゴールドの保険料を支払える人つて、一体、どんな生活してるんだろう。確か、入会時に1千万円支払い、月々の保険料は100万円を超えていたと思う。ふざけた世の中になったものだ。

母の胸に耳を当てる。

心臓は動いている。息もしている。まだ、生きている。

「かあさん！　ねえ、目え覚まして！！　お願い！」

母はぐったりしたまま、ピクリとも動かない。

やがて、軀をかき始めた。

まずい……

母の顔を横に向けて、とりあえず舌が気道を塞がないようにする。

私は決心して、電話を取った。

「もしもし。すみません。救急車一台お願いします」

電話を置いたあと、私は、母の尿で濡れた自分の靴下を剥ぎ取り、台所横の小さな部屋に入って片っ端から机の引き出しを開けた。大事なものがしまつてあるはずの机。

ヘソクリや通帳はここにあるはず。もしかしたら、私の知らないところで、広大な土地なんか持つてるかもしれない……と期待しつつ、そんなわけないか、とため息。

普通預金が240万円、定期預金が650万円。

どうやら、それがうちの全財産らしい。仕方がない。

私は、母の保険証をバッグに入れた。

救急隊が到着する前に、母の下着を替えておきたかった。

バスタオル数枚を持つてきて、母の腰の辺りにかけ、下着を脱がす。重い。何て重たいの。濡れた下着はべっとり臀部にしがみついていて脱がすのが大変だった。

涙が出てきた。

「かあさん……」

バスタオルで下半身を拭いて、ついでに、床もそれで拭く。

力づくで清潔な下着を大腿部まで引き上げたところで、サイレンの音がけたたましく鳴り響いたかと思うとすぐ近くでぴたっと止まった。

救急隊員が到着する。

最初に、3万円を請求された。

財布からお金を出す。

領収書を渡された。

「確定申告の際、これも出されるといいですよ。医療費の一部とみなされますからね」

救急隊員はそんなことを言った。

「すみません。あの、スカートだけでも……」

箆笥からスカートを引っ張り出してきて、そう言った私に、

「一刻も早く搬送しましょう。毛布をかけるから大丈夫」

救急隊員は、二人がかりで母をストレッチャーに乗せた。

私も後をついていく。

「希望の病院はありますか？」

「いえ。公立病院でお願いします」

「……そうですか。お母さん、状態が深刻そうだから、できれば民間病院がいいけどなあ。地中海病院だったら、ここから一番近いですよ」

「すみません。無理です」

「そうですか……」

救急隊員は、舌打ちをした。

私に聞こえないと思っていたのか、油断したのか、それとも、わざと？

救急隊員の心の声が聞こえたような気がした。

（ちえつ。あそこだったら話が早いのに。公立病院か。今から探さなきゃならんじゃないか）

第2話 国会

遡って、2014年 第184回通常国会・・・

「病院2系統性原案に賛成の方はご起立ください」

背広が椅子に擦れる音が響いて、多くの議員が立ち上がった。

品川議長の声が高らかに議事堂に響く。

「採決の結果、本法律案は、多数をもって原案どおり可決されました」

議員席から拍手が送られた。

長らく続いた日本の国民皆保険制度が廃止された瞬間である。

衆議院を通過した本原案は、あっさりと参議院でも可決された。

医療制度改革を推し進めてきた与党。

当初、野党の多くが病院2系統性原案に反対していた。しかし、結局のところ、野党はそれに代わる有効な対案を示せないまま、時間だけが過ぎた。

（因みに、2系統性というのは、社保と国保ではない。これらは、すでに一本化され『国民保険』となっていた。2系統とは、国営と民営という意味である）

勤務医の過酷な労働状況が明らかになるにつれ、政府は、開業医の締め付けを行うことで、開業医から勤務医への流れを作るつもりでいた。

ところが、その思惑は外れた。

まず、団塊の世代の開業医達が、次々と現場から去っていった。本来なら、あと10年くらいは社会貢献できるはずの医師達が、今が潮時とばかり『医師』という仕事を放棄した。もう少し若い世代の開業医達は、開業時の借金を返せないまま倒産するケースが増え、

中には自殺に追い込まれる者も増えた。

一方、病院も大変だった。政府が改革を打ち出すたびに、新たな天下り団体ができ、現場はそのための新規の仕事が増えるばかりで一向に労働環境が改善する兆しはない。

医師、看護師、薬剤師、放射線技師、検査技師……現場を担う労働者はことごとく疲弊していた。

悪循環が進行し、医療現場はますます荒廃していった。もともと現場を締め付けることで医療を崩壊させるのが官僚たちのシナリオだったという見方をする者もいるのだが……

それはさておき、医療崩壊の悪循環をストップさせる一つのアイデアが病院2系統性法案であった。

標準的な医療を提供する公立病院と、より高度な医療を提供する民間病院の二つに分ける法案である。公立病院は今までと同じく健康保険料を国に納めることで受診可能とする一方、民間病院は民間の保険会社との提携か全額を自費で払うことによって受診可能となる。

野党の意見は、これまでと同様、個別契約をする人達も等しく国に健康保険料を課すべきとしていたが、『公立病院を受診する意志の全くない人たちに保険料を課するのはどうか』で議論が分かれた。

結局、病院2系統性法案が通過したことで、国民皆保険制度は事実上廃止された。

政府は、『経済的に余裕のある人たちは自立して頂き、どうしても国の力が必要な人達への面倒を見ることに力を尽くしたい』と謳った。

何と耳障りのいい言葉であろうか。

実際には、富裕層からの保険料納付金がゼロになったことで、国民保険の財政状態は保険としての機能を果たさないレベルにまで下がった。他の国家予算から補填することも政府はしなかった。結果、

国民の受ける医療レベルに雲泥の差が生じた。最先端の医療は民間病院、そして、公立病院はまともな医療を提供するにはあまりにもお粗末な状態となった。それでも、多くの国民は公立病院に頼らざるを得ないため、外来受診しても、気が遠くなるほど長い時間を待たされ、そして、入院待ちの間に病状が悪化するのは当たり前前の状態になっていった。

国民は、国の健康保険に加入している群と、民間の保険会社と契約している群、それに、いずれにも属さない群（国にも保険会社にも保険料を支払っていない群）に分かれた。

国としては、『国民の自由な選択』を尊重したという名目が成り立つ。第3の群に対して責任を持つつもりは国にない。切り捨てる医療である。

沙希の母親は、国民保険の支払いをしていたことから、公立病院での治療は保障されていた。民間の医療も受けようと思えば可能である。保険が利かない分、自費で支払えば済むことであつた。問題は、医療費が異常に高い、という一点であつた。

第3話 搬送

母は救急車に乗せられた。私も母に続いて乗り込み、ストレッチャーの横に座った。

救急隊員の一人が、酸素マスクを母の顔につけたり瞳孔を確認したりしてバインダーに記入している。

腕に巻きつけられた布がヴーと音を立て、シューツという解放音が終わるころ、母の頭上にあるモニターに220-130と言う数字が現れた。

血圧を測っているのだろうか。

運転席にいるもう一人の救急隊員は、あちこちに連絡を取っている様子だった。

「62歳、女性です。はい。両側に縮瞳しゆくとうがみられます。ええ。いえ、ですから、急いでいるんです。ダメですか？　そうですか……」

運転席から大きなため息が漏れる。

「段々遠くなるな。ふうー」

再び、母の腕の布がヴーと音を立てる。

「……脳神経外科医がいなくてもいいから、何とかありませんか？　ですから、意識レベル300なんです。何とか……」

救急隊員の声は、段々懇願の色を濃くしている。

急病人のたらい回し……

マスコミが騒いでいた決まり文句。このことなんだ。たらい回されていると言うより、救急車ともども固定されて動けない状態なのだ……

これが現実か、と、妙に冷静な私がいる。

母は、このまま死んでしまうのだろうか……

ぼうつとしたまま、運転席の救急隊員の会話を聞き、モニターを

いじったりバインダーを片手に記録したりする目の前にいるもう一人の救急隊員の動作を眺めながら、慌しい雰囲気につかわしくない私がそこにいた。

母の顔を眺めて、心細さがピークに達したころ、いきなり救急車のサイレンが鳴り出した。

「受け入れ病院が見つかりましたよ。高速に乗ります。約2時間半で到着しますから、頑張りましょう」

救急車は県を二つまたいで走ることになった。

私は、色々なことを考えていた。

やっと、診てもらえる。良かったね、母さん……

自宅からずいぶん遠くに行くんだなあ……

今日、私はどうやって帰ったらいいのだろう……

夕飯、どうしよう……

お金、大丈夫かなあ……

救急車の乗り心地は最低だった。

ゴツゴツしたシートから、もろに振動が伝わる。

サイレンの音も正直うるさかった。今まで私の知っていた救急車のサイレンは、クレシェンドのピークの後、目の前を過ぎると急に音程を変えてデクレシェンドで去っていた。それは、小さな興奮をもたらし、やがて消えていく種類のもだった。今、車の外で鳴るサイレンはいつまでも同じ大きさ、同じリズム、同じ音程で、腰に響く振動と共に私の体の中に無理やり入り込んでくる感じがした。それは、いつまで経っても私を平穏な世界に戻してくれない非情さを伴っている。

母の頭の上にぶら下がっている数字の羅列の紙が気になって目を凝らして覗き込んでいたら、気分が悪くなってきた。

定期的に測定する血圧の記録用紙が自動的に排出されているのだと気づくのと、自分が救急車に酔ったことに気づくのと、ほぼ同時だった。

何てこと……

母さんがこんな状態なのに、私ったら情けない……

まだ、走り出して30分と経過していない。

母が意識のない危険な状態だと言っのに、これから1時間以上も吐き気に堪えなければならぬ苦痛に気が滅入っていた。

第4話 菊花病院

結局、私は、それから15分ほど我慢していたが、ついに堪えられなくなつて救急隊員に吐き気がする旨を伝えた。隊員は「このまま停まらずに病院まで行きますね。お母さんの命に関わる状況ですからね」と言い、ビニール袋をくれた。

確かにそれは正論であり、母の病状を考えれば有難い方針だったけれど、同時に、こんな時に呑気に車酔いしている私を暗に非難しているのだろうか、と棘のある隊員の言いつぶりにひねくれた解釈も与えていた。

ビニール袋を抱えて、私は救急車内でゲロゲロ吐いた。

口の中に酸っぱいネバネバが残つて、私は気持ちが悪かつた。うがいの一つでもしたいところだが、そんな贅沢を言っている場合でないことも承知していた。

大量の自分の吐物を含んだビニール袋の口を握り締めて、私は、堪えた。救急車内に私の匂いが充満している。隊員は何も言わなかった。非難めいた言葉も、そして、同情の言葉も。

ようやく救急車は病院に到着した。

来たこともない場所。知らない病院。やっと救急車から降りることができるといふ安堵の気持ちの一方で、母の容態も気になつていった。加えて、見知らぬ土地に身一つで来てしまったことに、言い知れぬ不安が突き上げてきた。外の空気を吸って私の吐き気は収まりつつあったが、それと反比例するかのように、急速にどうしようもない心細さが襲つてきた。母は相変わらず意識がないままで、その容態や救急隊員のこれまでの様子から、命に関わる深刻な状況なのだということを理解していた。こんな心細い思い、始めてだ。今まで、困ったことが起きた時は何でも母に相談してきた。それができ

ないのだ。

病院は古びていた。

玄関から西口にあたる救急車搬入口に停まった救急車の後方から私は降りた。

公立病院でそれなりの大きさがあるように見えたが、自動扉ではないドアを救急隊員が手で開けるのを見たとき、新たな不安が私を襲ってきた。

『きつかひょういん菊花病院』とある。

菊花市は、区画整理で新しくできた市だった。このあたりは菊花の栽培が盛んである。菊花市という名は、市の名前としては美しいかもしれない。しかし、これが『病院』とくつつくと、何と不吉な響きになることか……。病院の古さからいくと、区画整理前には、別の名前の病院だったはずだ。古い地名の病院だったのだろうか。どうせならこんな縁起の悪い名前ではなく古い名前を残しておいてほしかった。

設備はちゃんとしているのだろうか？　ちゃんとしたドクターが診てくれるのだろうか？

私の不吉な予感が残念ながら的中することになる。

救急搬入口から救急隊員が母を運び入れる。

しかし、中に一步入ると、とてもすぐに診てもらえるとは思えなかった。

モニターの音がけたたましく鳴り響くのが聞こえ、大声が飛び交っている。

そこにいる医師らしき人物は、患者の胸に手をあてて体重を乗せてはリズムカルに押している。

「ボスミン、イチアン！」

医師の白衣が激しく動く。

「ええいつ、くそつ。動け！　動け！　動いてくれ！」

離れた場所から別の看護師さんが大声を上げる。

「先生！ 腹部外傷の患者さん、血圧が下がり始めました。80の40です！」

医師は心臓マッサージを繰り返しながら顔を上げた。

「輸血パックはまだ？ 点滴スピードを上げる！ 丹羽はどこだ？ 何やってんだ、全く。全館放送を入れる。救急処置室に至急来い！」

険しい顔の医師はこちらをちらつと見ると、手を休めずにはつとした表情をした。

「おい。誰か、救急隊から話を聞いてくれ。次の患者さんだ」
しかし……

誰も動こうとしない。

「そこ、離れて。カウンターショックいくから。いち、に、さん」
ボンという音がして患者さんの上体が軽くはねる。

騒然とした処置室の中。自然災害か何かで大勢の患者が運ばれたのだろうか。

とても、私の母まで手が回らないという雰囲気だった。

医師とは反対の隅にいた看護師が遠く離れた医師に叫ぶ。

「せんせい。12誘導取りました。何かおかしいですけど」

機械から出た長い紙切れを切って、その看護師は、医師の所に走っていく。当の医師は、天国とこの世の間をさまよっている患者と必死で格闘中である。彼女の手にあるのは、たぶん心電図。

医師はその紙切れを覗きこんで小さなため息をつくと、看護師の目を見て指示を出す。

「ミリスロール開始。トロポニンを至急で追加。生食20にモルヒネ1アン、半分入れて。それから、大急ぎで田崎先生に連絡」

「田崎先生は今、心カテ中ですけど」

看護師さんが即答している。

「まじ……。ということは、循環器の連中は誰もいないということか……。カテ室に連絡を入れてAMI患者入院の旨、伝えてくれ。」

まったく、毎日毎日ここはアフリカの奥地が……」

二人の救急隊員が私の横で囁きあっている。

「心筋梗塞か……。時間との勝負ですね」

「ああ。循環器の先生たち、心臓カテーテルで手が離せないみたいだから、大久保先生、このまま患者と一緒に病棟に消えてしまう可能性があるな。ボサボサしてたら、引き継ぎできずに俺たち帰れなくなるぞ」

ピーツというアラームの音が鳴り響く。

「もう一回いこう。いち、に、さん」

ボン。

一瞬、静寂になった、気がした。

「家族を入れて」

医師は首を横にふりながら小さくつぶやくと汗を手の甲で拭き大きくため息をついた。

全てが終わったのだ。一人の命が目の前で果てた。

すかさず私達を連れてきた救急隊員の1人が医師の所へ駆け寄る。人の命が息絶えたのを目の当たりにして、私はショックだった。しかし、これでようやく母を診てもらえる、という気持ちが確かに私の心を横切った。思わず自分の中のエゴイステイックな感情に目を閉じる。

医師と救急隊員が話をしたのは、ほんの短い時間だった。

「そうですか。アタマですね。わかりました。矢部さん、頭部CT割り込ませてもらってきてよ」

看護師が「はいはい、頭部CTね」と返事をしたかと思うと、今度はそろそろと大勢の人たちが入ってきた。

先ほど息を引き取った方の家族のようだ。さきほどのベッドを取り囲んだと思うと、処置室内に大声で泣き叫ぶ声が響いた。

それにしてもこれだけ多くの重病人を診る医師がたったの一人。看護師は3人が走り回っている。すごい世界だ。患者の一人はたった今心臓が止まったばかり。一人は、循環器の重病人。もう一人はお腹から血を流して輸血が必要な状態。それに、実を言うと私のすぐそばに、あと二人、ストレッチャーの上に載った患者が待機しているのだ。一人はお腹を抱えてうんうんうなっている。一人はじっとしているが、それが重病なのか、軽いのか、私にはわからない。ただ、少なくとも、まだ、二人とも診察をしてもらえない状態であることには違いない。

看護師が一人近づいてきた。私は窓口以案内されて母の保険証を渡し、カルテを作ってもらった。その後、処置室の手前の椅子に促され腰掛けた。カーテンの向こうに母さんの姿が見える。

60歳代の看護師に話を聞かれて、母が台所で突然吐き気を訴えたあと倒れたことを説明した。

看護師の質問に対して一つ一つ答える。

高血圧や糖尿病は多分ないこと、常用薬はないこと、かかりつけ医もいないこと。健康診断は2年前に受けていたらしく、コレステロールがやや高いのと大腸にポリープがあるらしいことを聞いている。タバコは吸わない、酒は付き合い程度。手術は30年前に乳腺炎で切開をしたことがあるだけで、あとは、今日倒れるまで健康そのものであったこと。

私と母の二人暮りで、父は4年前に他界したことも。

看護師の質問は延々と続くかと思われた。こんなことまで聞くのか、と半分感心しながら質問に答えた。が、途中で気づいたのだが、ストレッチャーに乗った母は、そのままだ。

「あの……」

「はい？」

「あの、母の治療はまだ始まらないのでしょうか？」

「ええ、もう少し辛抱してくださいね」

「でも……、あの、母の容態あまり良くないですから、なるべく急いで……」

看護師は私の言葉を途中で遮って強い口調で言った。

「患者さんはあなたのお母さんだけじゃないんですよ。見ればわかるでしょ」

そんな……

私の鼓動は急に速くなってきた。

ここの病院、本当に大丈夫だろうか……

私の考えはどんどん悪い方向へと進んでいく。

私が黙り込んだのを確認して看護師が妙に優しい言葉をかける。

「なるべく早く先生には診てもらいますからね。あなたは気分は少しは良くなった？」

きつく言い過ぎたと思ったのだろう。ご機嫌取りのような言葉はちつとも嬉しくない。

「あ、はい。ありがとうございます」

お礼の言葉を口にはしたが、看護師、病院に対する不信感はぬぐえないほどに膨らんでいた。

第5話 放置

母が倒れてからすでに3時間半が経過している。相変わらず母はストレッチャーの上に寝かされたままだ。先ほどと違うのは、モニターが取り付けられたことぐらいか……

先ほど頑張っていた医師は、心臓の悪い患者と共に風のように部屋から消えていた。看護師も、しばらくバタバタしていたが、やがて職員は誰もいなくなった。私は、そつと処置室に入った。

（こんなことなら、スカートを穿かせておけばよかった）

毛布の下は下半身がみつともない状態であつたことを私は急に思い出した。

それにしても、これが日本の救急医療の実態なのか……

救急車で運ばれてきたにも関わらず、母さんは救急処置室に置き去りにされたまま。看護師は一通り私に質問をしたあと、部屋から出て行った。そして、処置室には、すぐに治療が必要な患者数名が取り残されている。

そうこうするうちに、南側の大きな扉が開いた。

（やっと診てもらえる）と思ったのは一瞬だった。

ガラガラと音を立てて運ばれてきたのは、別の患者だった。

看護師二人が男性の乗ったストレッチャーを処置室に運び入れてきたのだ。

あの……

と問いかける間もなく、二人はまた消えた。ストレッチャーを置き去りにして。患者は、時々腕を挙げたり、緩やかな動きをしたり、うーという低い声を立てていた。

新たな重病人の登場で、さらに私の不安は増した。私は自分の不

安を和らげるために母の手を握った。酸素マスクをあてがわれた状態で母はじつとしている。

母さん……

母の顔を見ると、涙が出そうだ。でも、ここで泣いたら天国から天使がすぐに降りてきそうだ。それはダメ。我慢しなくちゃ。何とか助けてもらえるって。自分に言い聞かせる。

突然、電話が鳴り出した。

処置室の一角にある診察台の上にある電話機だ。

職員は誰もいない。当然、電話に出ることのできる人間はここにはいなかった。私以外には……

誰も出る人のいない電話の音に耐えるのは相当の苦痛だった。鳴り止んだ、と思ったら、数秒後に再び鳴り出した。

私の鼓動が激しくなる。ここには、いるだけで苦痛だ。

バタバタと人の走る音がして、看護師が飛び込んできた。

今度は40歳ぐらいの看護師だ。

「はいはいはい……」

そう言いながら受話器を取った彼女は、耳に当てたあと「ちつ」と言って受話器を置いた。

「遅かったかあ」

私の視線を感じたのか、彼女は私の方に顔を向けた。

「あ。日野さん？」

彼女は、私の名を口にした。

「は、はい。そうです……」

「もう少し待っててくださいね。ようやく先ほどの方のCTが終わりましたので、もうすぐ呼ばれると思いますから。予約患者さんが一杯いるんですけど、何とか割り込ませていきますからね」

私はここへ来て初めて、私の心を落ち着かせてくれる言葉をもらった気がした。

大きな不安の中で、小さな希望が見えた気がした。

すると、また、診察台の上の電話が鳴った。

看護師は、はいはい、と言いながら受話器を取る。

「え？ いや、困りますよ。手一杯なんですから。そんな……。一方的に受けないでくれませんか？ いや、いくら病棟に少し空きがあるからって、さっき来られた方の診察もまだできない状態なんですよ。ええっ？ ちょっと待ってくださいよ。無理だって、いくらなんでも……」

そこで電話は切れたのだろう。看護師は受話器を睨み付けて言う
「ええ加減にせえよ。自分らは診なくていいと思って！」

看護師の言葉が終わらないうちに、再びドアが開いて、今度は白衣を着た医師らしき人が急ぎ足で入ってきた。さっきとは違う人だ。ひよろつとしたその人の身に着けている白衣はよれよれだ。

シャーカステンの明かりが点る。医師はガシツ、ガシツと複数枚のCT画像をシャーカステンにはめ込むと、腕を組んだ。右手で顎をさすりながら、時々画像に近づいたり、画像の裾を持ちあげて、斜め下から覗き込むようにして確認している。

「ふーむ。困ったな……」

その時、医師の思考を遮るように救急車のサイレンの音が聞こえてきた。

「え？ また、救急患者なの？」

誰にとりも無くそうつぶやくと彼はCTを右手に掴んだまま後ろを振り返った。

その時、私と目が合った。後姿の雰囲気から中堅クラスの医師と思っていた私はちよつとびっくりした。どう考えても老人の部類に入りそうな顔立ちだ。

彼が私に何か言おうとしたその時、また、電話が鳴った。

「もしもし。一条ですが。……え？ どうして先に連絡くれないの

？ いや、他に病院がないったって、どう考えても無理でしょう？
私の外来だって1時間すっぱかしたままですよ。で、何？ 事故？
ああ、そうですか。はいはい」

明らかに電話を取って不機嫌になった一条医師は、診察机に座ってカルテに記入を始めた。それと同時に後ろのドアが開いた。私たちが入ってきたドアだ。外部と直接つながっている救急外来通用口。

新たな救急患者……

母がここへ運ばれてから随分時間が経つのに、一向に状況は進展しない。一体いつ診てもらえるのだろう。

正直言って、もう来ないでよかった。わがママかも知れないけれど、患者が増えれば増えるほど母の手当てが遅くなるし手薄になる。

ドアから新たな患者が運び込まれても、一条医師は机に向かったままだ。

患者を診ることなく、一条医師は大声を上げた

「おーい！ 誰か！」

先ほどの40歳代の看護師が現れた。

「ちよっと、救急隊員の話聞いて。こっちの指示はもうすぐ終わるから」

「はいはいはい」

『はい』を繰り返すのは、この看護師さんの口癖なのだろう。

患者さんは2人。一人はストレッチャー、一人は救急隊員に肩を支えられて入ってきた。

看護師さんは救急隊員と話をしたあと、ストレッチャーの患者さんを覗きこんだ。

「私の手え、握ってくださいーい。はい、反対。はいオッケー」

バインダーに何やら記入した後、歩いて入ってきた患者さんに話

しかける。

「あのね、あなた方より病状の重い患者さんが4人順番待ちしているの。こっちの彼はあなたより急ぐ必要がありそうだから救急患者5番目扱いにします。あなたは、軽そうだから基本的には外来の患者さんの中に入れさせてもらいますね。申し訳ないけど」

第6話 CT検査

看護師の提案は私には尤もな事に思われた。とにかく、今は重症の母の治療を最優先にしてほしい。しかし、彼は不服なようだ。

「ちよつと、何言ってるんですか？ むっちゃ痛いんすよ。多分、骨折れてますよ」

そこまで言つて、彼はキツと看護師を睨み付けた。

「……そんな、風邪の患者らと一緒にすんなよ。すぐに医者を呼べよ」

途中から、明らかに怒りで興奮してきたのが分かる。

「申し訳ないけど、ここの人達はみんなまともに喋れないの。喋れる患者は『軽症』なの。わかる？」

「ふざけるな！ 貴様、何様だと思ってるんだ！ 外来待ちつて一体どんだけ待たされるんだよ？」

看護師は澄ましている。

「正確にはわかりませんが、多分、8時間くらい……」

「なにい。ちよつ、8時間つて、てめえ、ふざけてんのか」

今にも彼女を掴みそうな勢いである。

「隣に浜病院がありますよ。あそこだったら迅速かつ丁寧に診てもらえると思いますけど。何だったらこちらから電話連絡入れときましようか？」

看護師さん、やるなあ。浜病院は多分、民間病院だ。早く診てもらいたかったら、充分な金を払つて、しかるべき病院に診てもらえ、ということだ。

不埒な若い男がやられたのを横目で見ながら、内心ほくそえんだ私だが、直後、その言葉がそのまま私にも当てはまることに気がついて一気に暗がりにつき落とされた。

もしも私に充分なお金があったなら、こんな遠くの汚い公立病院

ではなく、地中海病院ですぐに診てもらえたはずなのだ。よれよれの白衣を着た老人医師ではなく、腕のいい医師にそれなりの治療をしてもらえただろう。いや、一条医師が腕が悪いと決め付けたわけではないのだが……。

若い男へ向けられた看護師のこの言葉は、命が金に左右されることを端的に私に教えてくれた。

目を閉じたままの母の顔を見る。涙が出た。少し紅潮した頬。生え際に1cmほど白髪が見える。染めていたのか……。知らなかった。じつと顔をみつめる。こんなにジロジロ観察したことつてないなあ。左頬の小さなシミも、耳たぶのすぐ後ろの小さな黒子も、今始めて知ったように思う。

手を握る。看護師の真似をして脈に触れてみる。その強い拍動は、母がしっかり生きていることを私に教えてくれている。

大丈夫。きつと大丈夫。

ふつと、ベッド横のモニターを見る。モニターの数字は190 - 100を示していた。

これって血圧だよな？

190って高いんじゃない。下げなくていいんだろっか……

その時、看護師の声が響いた。

「日野さあん」

顔を上げると、20歳代だろうか、若い看護師がニコニコしてすぐ前に立っている。

「日野さあん。CT検査に行きましょうね」

病院に到着してからすでに1時間が経過していた。すでに日が暮れかけているのを、救急搬入口のすりガラスが示していた。これから一体どうなるのだろう……

看護師が一人でストレッチャーを引っ張っていった。手馴れた様子で、器用にストレッチャーを運転(?)していく。

私もついて行くことにした。ストレッチャーの後ろを持って手伝う。

看護師さんがニツコリする。

「ありがとうございます」

曲がり角は結構難しい。これを若い看護師は一人で運転していくのか…… 大変な作業だ。

CＴ室の前に来た。

「少しここでお待ちくださいね。前の患者さんが出てきますから」
そう言って、若い看護師はCＴ室のドアを開けて中に入っていた。

そういえば、さっきの40歳代の看護師はCＴの予約がびっしりだと言っていた。なるべく沢山の検査を入れ込もうと時間のロスを最小限にする工夫。次々に患者さんをCＴ台に乗せるために、私の母は、ここで待機しているのだ。

やがてCＴ室の扉が開いて、病衣を来たおじいさんと先ほどの看護師が出てきた。彼女は、今度は点滴台を上手に運転している。私の前まで二人が来ると、看護師はおじいさんの耳元で大声を出して言った。

「ふなこしさあん。ここの椅子に腰掛けて少し待っててもらえますか？次の人のお世話をしますから。それが済んだら病室まで戻りましょうね」

ふなこしさんと呼ばれたおじいさんは、「ああ、ああ」と頷きながらゆっくり私の後ろの青い長いすに腰かけた。

「さあ。日野さん、中に入りましょう」

看護師は母に呼びかけて私に軽く会釈をするとCＴ室の中にストレッチャーごと消えた。

CＴ室のドアが閉まる。ドアには覗き窓がついていた。

さきほどの看護師が白衣を着た男の人と一緒に母を抱えてCＴ台に移動させている。看護師というのは何と体力のいる仕事だろう。

男の人が別の部屋へ消え、看護師だけが出てきた。

「ふなこしさぁん。お部屋に帰りましょうかぁ？」

看護師は腕を抱えるようにして”ふなこしさん”を立たせた。

「検査が終わる頃にはまた降りてきますから」

看護師は私に向かってそう言つと、”ふなこしさん”と点滴台と共に私のそばから離れていった。

CＴ室には母が一人で台の上に横たわっている。私は、ドアの外で一人で立ち尽くしていた。

台の上の母は孤独に見えた。私も孤独だった。それでも、ようやくここまで辿りついた、そういう気持ちもあった。あとは、どんな宣告がされるのか……。

宣告か……。私はなるべく考えないようにしようと思った。想像したって仕方のないことだ。なるようにしかならない。こんなときに頭を働かせてもろくなモノは出てきつこない。

ああ、今、私の目の前で、熟睡していた母がＣＴ台からむくつと起き上がってくれたら、どんなにいいだろう。「私、何してるの？ここどこよ？」なんて言い出してくれたら！！そしたら、私と母は、このまま夕飯を食べて家に帰るのだ。私がどれだけ心細かったかを話して、二人で笑いながら……。

何と虚しい想像だろう。自分に都合のいい想像は、結局私を叩きのめすための単なる前置きにしかないと気づく。考えまいとすればするほど私の頭は勝手な想像を膨らませていくのだ。油断すると白い布を顔にかぶせられた母の映像が浮かんでくる。それを振り払うように、むくつと起きる母の姿を思い描いてみて、そして絶望する。自分の頭なのに完全に自分でコントロールできなくなっている。もう、気が変になりそうだ。ここから逃げ出すことができるなら、どんなに気が楽だろう……。

第7話 後悔

やがて、ストレッチャーに乗せられた母がCT室から出てきた。私の苦しみも知らず、母は眠ったような顔をしている。ホントにいい気なもんだよ、母さん。

再び、救急処置室へ戻る。

母が頭のCT検査を受けている間に、救急処置室の顔ぶれが入れ替わっていた。先ほどまでウーウーなっていた男の患者の姿はなく、私たちの後に救急車で到着した二人連れのうち重症と思われる人と、さらに車椅子に座った見知らぬおばあさんがいる。あの態度の悪い若い男は姿を消していた。患者は、どこからか次から次へと湧いて出てくるようだ。

一条医師の姿はない。どこへ行ったのだろうか。

「ちよつとお待ちくださいね。フィルムが仕上がり次第、ドクターが来ますからね」

母を運んできた若い看護師は、私に早口でそう告げると、再び急ぎ足で部屋から消えた。こんな状態で、よく医療ができるものだ。こんなに患者だけが置き去りにされる状況がしょっちゅう生じる中で事故など起きないのだろうか……

突然、車椅子のおばあさんが大声で私に話しかけてきた。

「ちよつと、カズちゃん。こつち来てえ。背中がな……」

え？ カズちゃん？

「あ……私、カズちゃんじゃないですよ。間違えてらっしゃるのかな？」

無視するわけにもいかず、私は、優しく答えた、つもり。

「ああ、カズちゃんじゃなかったか。あなたはどちらさんですか？ ほら、あの、ひまわり。ひまわり、花瓶に差しときいな。どこやったかな、ひまわり。なあ、カズちゃん……」

そこまで聞いて、私はこのおばあさんが認知症を患っていることをようやく理解した。

正直言って、この非常事態に、見知らぬ認知症のおばあさんに優しくできるほど私は人間が大きい。おばあさんはべらべら喋り続ける。モチがどうしたの、ヒマワリがどうの、モチとヒマワリが交互に出てきて延々と続く。私はいよいよ泣きたくなってきた。誰か職員さん、早く来てよ。

私の祈りが通じたのか、そう願ったと同時に、ドアが開いて、先ほどのCT室の白衣のお兄さんが大きな茶封筒を抱えて入ってきた。が、彼は、診察机にそれをポンと置いただけで部屋から出て行った。母のCTかもしれない。

間もなく、一条医師が入ってきた。よれよれの白衣を揺らしながら、バタバタと。

「どれどれ」

茶封筒の中から画像を取り出して、ガシツガシツとシャーカステンにぶら下げる。

「ひええ。こりやまた、すごい」

画像をろくろく見もしないうちから一条医師は小声でつぶやいた。私の鼓動は段々高まっていく。じっくり見なくても一目見てわかるような異常な画像……ということなのだろう。母がむくつと起き上がる想像は、1000分の1の期待を抱いていた私のその超楽観的な想像は、その瞬間に音を立てて崩れていく。

一条医師が振り向いて私にお辞儀をする。

「日野さんの娘さん……ですか？」

「はい……」

と答えた私の声は自分で驚くほど小さくてかすれていた。

「こちらへどうぞ」

一条医師が私を招き寄せる。

私はおずおずと診察機の近くまで歩いて行った。

「これ、お母様の頭のCT画像です。上から順番に水平に切っています。こんな風に」

と言つて、一条医師は自分の頭の右側をボールペンでシュツシュと前から後ろに往復させた。

「……ここにあるのが小脳です。そして、これが出血巣^{しゅつしやくそ}。お母様の病名は小脳出血です」

私は何も言えずに突っ立っていた。喉がカラカラでまともに反応することさえできない。呆然とする私に、一条医師は説明を続けた。「かなり広範囲にわたっています。これから内科的な治療を開始しますが……、正直言つて、かなり危ない状態です」

「……」

「明日まで……持ちこたえられるかどうか……」

「……」

嘘だ。つい何時間か前までは、母は元気だったのだ。私と一緒に台所に立っていたのに。

一条医師に懇願する。

「お願いです。助けてください。お願い……。何とか手立てがあるでしょう？ 手術をするとか、何とか……。先生、ここは病院ですよ？ 先生！……」

後は、言葉にならなかった。こみ上げてくる涙は後から後から溢れてくる。

母さん、助けて。母さん……私を助けて……お願い……

気がつくとき、私は、床に座り込んで顔を両手で覆って泣いていた。もう、何が何だかわからない。

救急車を呼んだ時から、搬送されている時から、ここへ着いた時から、とつくに私の頭の中ではぼんやり想像していたことだ。命に關わる状況だということ……

でも、そんなにはつきり言わなくなつて！

明日までもたない？

日本の最新医療ってそんなものなの？

どうして、さっきまで元気だった母さんを助けることもできないの？

だいたい、この医師、やる気あるの？

こんな病院に来るんじゃないかった！

私の頭の中は、怒りと悲しみとが真つ赤なマグマになっていた。次第にそのマグマは私の中で膨れ上がりフツフツと音を立てて燃えだぎってきた。

「何とかしてください！ 絶対に助けてください！ 私の母さんをそんなに簡単に見捨てないで！！」

私は立ち上がり、一条医師のよれよれの白衣を握り締めていた。

一条医師は、憐れみの目で私を見ながらゆっくりとした口調で静かに言った。

「お気持はわかります。しかし、お母様の出血はあまりにも大きい。そして、すでにヘルニアをおこしかけています。ここで提供できる医療にも限界がありますし、それに……」

一条医師はここで一旦言葉を切ってから、私の目を覗き込んだ。

「ここでなくても、仮に有名な民間病院の最高の医療を受けたとしても、多分、救命は無理だと思います。残念ですが……」

諦めると言うのか……

民間病院の最高の医療を受けたとしても、多分、多分、多分……

私の頭の中で、『多分』というその言葉だけが心のフィルターに引っかかった。逆の可能性をも秘めた言葉、『多分』。

つまり、民間病院だったら助かる可能性があったということだ。もしも私に有り余るお金があったなら、その可能性に賭けることができたということだ。金がないばかりに、あっさり母の命を差し出さなくてはならないのだ。こんなことが許されていいのだろうか。

母の命はその辺に落ちてる石ころと一緒に。

金持ちの命は医師達が全力を尽くして助けてくれる。でも、金の無い者は、黙って死んでいけと言うのか。何と言う不公平だろう。許せない……

私の中の真っ赤なマグマは、悔し涙となって再び両の目から溢れてきた。

誰か私の悲しみを沈めてください。

誰か私の怒りをなだめて下さい。

泣いても泣いても私の涙は枯れることを知らない。

地中海病院……

あそこに搬送してもらえば良かった。そしたら、こんなことにはならなかったはずだ。

借金してでも、あそこに運んでもらえばよかった……

無駄に過ぎてしまったこの数時間が急に惜しくなってきた。

倒れてからすぐに地中海病院に運ばれていたなら、多分母は元気に歩いて退院できたはずだ。

大きな後悔が私を襲ってきた。

どうしてお金のことを心配したのだろう。

お金は何とかなる。でも、でも、母の命は……

第8話 回想

一条医師は私に何か話したそうだったが、看護師に呼ばれて、次の患者の診察のために姿を消した。患者や患者家族は最低限の時間しか医師や看護師と接することができない。

患者家族としてはぶちまけたい不満が山ほどある。しかし、これだけ少ないスタッフが目の前を走り回っているのを見ると文句を言うのも気の毒な気がしてくる。

それに……

それなりの医療を受けたかったら、民間の一流病院を受診すればいいのだ。多額の金を積んで。公立病院を受診する時点から、最低限（私には最低限のもっと下のような気がするのだが）の医療で我慢するという意思表示をしたとみなされる。それが本意であろうとなかろうと……。私の中の怒りの矢はどこへ向けて放てばいいのか、その方向を見失ったまま私の中で燻り続けた。

母は3階にあるICUに入った。沢山のベッドが並んでいる。あちからこちからアラームが鳴って、看護師はバタバタ走り回っている。所狭しと並んだベッドの数に対して、看護師は、たったの2人。3つも4つもアラームが鳴っているのに、これじゃあ、とても対応できるとは思えない。

ICUのベッド上に横たわる母。

母さん……

目を開けてよ、母さん……

仕事に疲れて台所に行った時、母は昼食の準備中だった。

「あんたの好きな親子丼にしようと思ってね。あんた暇なの？ 暇だったらキャベツ切ってくれない？ トマトも冷蔵庫に入っているから、サラダを作ってちょうだい」

そういえば、朝食を済ませた頃から何だか調子が悪いと言っていた。病院も薬も嫌いな母が頭痛薬を飲むなんて本当に珍しいことだった。日頃から人一倍我慢強い人である。もしかしたら、あの時から頭の中では大変なことが起きていたのかも知れない。

私が冷蔵庫からキャベツを取り出した直後、母は、流しに手をつけて倒れたのだった。まな板の上には玉ねぎと長ネギが綺麗に切り揃えられていた。三つ葉と下味のつけられた鶏肉は、まな板の横に置かれた皿の上で出番を待っていた。

作りかけの親子丼。

親子揃って食べそびれた親子丼。

献立に困ると、母はよく親子丼を作ってくれた。

「あんたが好きだから」

それはウソではなかったが、死ぬほど好きということもない。簡単に作れるご馳走だったから、母はそんな言い訳をしていたのだろう。私も特別それを否定してこなかった。

私は翻訳の仕事をしている。報酬はたかが知れたものだったが、自宅で仕事ができるのが何といっても魅力である。

父が逝ってから、私は以前務めていた会社を辞めて、自宅で仕事をするようになった。母が心配だったから。もともと会社内でも翻訳を頼まれることが多かったので、その知識を生かせたらと思っていた。主な翻訳は、新しい商品のマニュアルや注意事項を始め非常に多彩な内容である。通常『産業翻訳』と言われるもので、小説などの文学的なものは含まれない。出来上がった翻訳は期限内にインターネットで翻訳会社に提出する。

採用試験は3つのレポートの翻訳を課された。運良く合格したが最初の頃は仕事量も少なかった。決められた期限の少なくとも3日前には必ず提出してきた。実績を積む毎に、頼まれる仕事量が増えてきた。仕事の量がそのまま報酬の額になる。

この仕事は自分のできる範囲で、きちんとこなしていくことが肝心である。仕事を取りすぎてこなせなくなると一度に信用を失うから要注意。仕事の打診が来ると、今抱えている仕事の具合と新しい仕事の内容を考えて返事をする。最初の頃は頑張って断らないようにしていたが、一度、精神的に追い詰められた苦い経験があつて、今は3件に1件くらい断っている。それだけ多くの仕事を回してもらえることに感謝である。

一日パソコンの前に座っているので、目が疲れるのと腰が痛くなるのが難点。部屋からふらつと出てくると大抵は母とお茶を飲んだりお喋りをして気分転換をする。今日も、午前中一杯頑張つて一つレポートを仕上げたところだった。

母は眠つたように横たわっている。小脳という所に変なことが起きているなんて、寝顔からだけじゃ全然分らない。一度音を立って崩れた淡い期待だったが、母がむくつと起きるあの妄想が再び私の中に湧いてきた。

そして、私は初めて空腹を感じた。昼食を取り損ねていつの間にか夜になっている。食事を取れるうちに取っておかなくちゃ。私が倒れるわけにはいかないのだ。ICUの窓から見える外は真っ暗。夜になっていた。看護師に尋ねると、院内の売店はとくに閉まっているが、売店横にパンやおにぎりの自動販売機があると教えてくれた。もう少しマシな物がほしかったら、病院の近くにコンビニとパスタの店と焼肉屋があるとのことだ。

私は、コンビニに行くことにした。エレベーターで一階に下りると、玄関脇の外来待合室には、こんな時間になっても大勢の患者が溢れていた。さながら避難所かどこかのようだ。咳をする者、ソファでぐったりする者、座る所がなくて壁際の床にしゃがみこんでいる者、皆一様に疲れた様子をしていた。

外へ出ると、細い雨が降るともなく降っていた。風が吹くと、霧

吹きで吹き付けられるように顔面に冷たい感触が生じる。病院のすぐ斜め前にコンビニが見えた。ライトを照らして走る車の切れ目を見て、私は道路を横断した。

見知らぬ町の見慣れたコンビニ。コンビニだけは、どこも似たようなものだ。こんな所でかすかな安らぎを感じている自分がおかしかった。

おにぎりはあらかた売り切れてしまっていた。ぶどうパンと一つだけ残った梅おにぎり、小さなミルクセーキを購入して私は病院に戻った。再び、診察待ちの大勢の人の間を縫ってエレベーターに乗り込む。ICUの前のピロティに来たが、あいにく、私の座るスペースはなかった。仕方なく、窓際に立って簡単な食事を大急ぎで済ませる。

美味しいかどうかさえわからないままに、ミルクセーキで喉のおにぎりを流し込んで、私の一人ぼっちの晚餐は終わった。

第9話 患者家族

家族用のガウンを羽織り、私は母の待つICU内に入った。

母の隣のベッドには、母より少し年上と思われる女性が横たわっていて、旦那さんなのだろう、しきりにその女性の背中をさすっている男性の姿があった。

母のベッドへ近づいていく途中、彼と目が合ったので私は軽く会釈をした。70前後だろうか。穏やかな表情のその人は、そこに横たわる女性と幸せな生活を送っていたのだろう、彼女に投げる愛情の眼差しは作ろうと思って作れるものではない。

私が不在にしていた間に、母の口には、緑色のチューブが突っ込まれ、テープで顔面に固定されていた。気道を確保する道具なのだろう。ちょっと驚いて母の顔をのぞきこんだが、母の容態そのものはコンビニに行く前と変わらない様子だった。ちょっとほっとする私は安堵のため息をついて、先ほどコンビニで買って来たティッシュと安物のタオルを袋から出して枕元に置いた。

後ろからふいに声をかけられた。

先ほどの男性である。

「お母さんですか？」

突然の質問にちよつとびっくりした。話し相手を探しておられるのかと思った。

「え、ええ。昼頃、突然倒れまして……」

「そうですか。時々、身体の向きを換えてあげる方がいいですよ。すぐに床ずれがきますからね。看護婦さん達はみな忙しいから、やれることは家族がやってあげないと」

やれることをやってあげる……。新参者の私に患者家族の心得を教えてくれているのだ。

「ああ、ありがとうございます。考えてもいませんでした」

彼の奥さんは臍臓がんのだそうだ。発見された時にはすでに手遅れの状態だったと言う。

肺炎を併発してICUで治療中だが、状態が安定したら退院の予定らしい。どう見ても退院ができるような状況ではないと思うのだが。

「ここはね、搬送されてくる患者さんがとても多いんですよ。なぜだかわかりますか？」

どう答えていいかわからなかった。

確かにその通りだった。次々に救急車がやってきた。お陰で母がICUに運ばれるまでに、こんなに時間がかかったのだ。

「公立病院が少ないからなんじゃないですか？」

「どこだってベッドが空いてないと入院できません。搬送患者が多い理由は、ベッドの回転が速いからですよ」

男性は淡々と話す。

「入院患者は無理してでも退院させられるのと、運ばれてきた患者が簡単に死んでいく。治療を受ける前に死んでしまう患者も多くいますしね。病院に多くを期待しちゃいけない。私は、どうせなら、家内の肺炎を治して自宅に連れて帰りたいと思っています。ここで死なせてたまるかって、そう思ってるんです」

同じ境遇にある者は簡単に心が通じることがある。彼の言葉の端々から、私と共通する思いを感じることができた。

私の中でさつきから燻っている怒りの捌け口がみつかった気がした。傷の舐めあいではないかもしれない。それでも、口に出せないよりましだ。

「さつき、先生から、明日までもたないだろうと宣告されたんです。それで、私……、私、民間病院に搬送してもらえばよかったと、後悔してるんです」

男性は少し考えこんで、ゆっくり答えた。

「どうなんだろうね。私には、どちらがいいかわかりませんが、少なくとも両極端の選択肢があることで、多くの人間が苦しんでいることだけは確かでしょうね」

彼は、奥さんの顔を覗き込んで口周りを濡れたガーゼで拭いてから、再び続けた。

「多額の金を積んで最高の医療を受けるか、原始的な医療で我慢するか。少なくとも公立病院では、やれる医療行為に極端な制限があるからね、勝負は速いですよ。例えば人工呼吸器。ここではほとんど使われないんです。保険が4日間しか利かないんだそうですよ。4日間で外せると判断されるケース以外は呼吸器はつけないらしいんです。それ以上つけたままになると、あとは、病院がその費用を負担することになりますからね。それに一度つけた呼吸器をはずす行為は『殺人罪』になる。病院側からすれば、そりゃあ、つけたくないですよ。つまり、国は、病気になったらさっさと死になさい、と言っているんですよ」

心臓に氷水がかけられた思いがした。

母の呼吸が止まったら、それはそのまま死を意味するのだ。人工呼吸器も使わない救急病院……。それが、今の日本の医療の現実なのか。

現役時代は医療機器販売の営業を担当していたという彼。仕事柄病院内部の事情も多少は知っている。今の医療情勢について素人の私とは違う見方をしていた。医者や看護婦に文句を言っただけで仕方のないレベルなんだと言う。

私が抱えている問題は、決して私だけの問題ではないんだと思った。

公立病院に課せられた極端な医療行為の制限。つい何年か前まで行われていた医療行為が、国にとっては『無駄遣い』と判断されて

いるのだ。生死を分ける重症患者の場合、民間病院へ行けば命拾いをし、公立病院へ行けばあの世行き。

『病院2系統制度』が導入されて5年が経つが、多くの国民が、今更、弱いものいじめの制度に過ぎないことを理解し始めている。でも、もう遅い。川の流れは高い所から低い所へ落ちるに決まっている。一度この流れを作ってしまった以上、流れ落ちた水を高い所へ戻すことはできないのだ。

「私たち国民の選んだ道なんでしょうよ。政治家を選んだのも国民だし、国民皆保険を守るべきとすら考えなかった。医療の選択肢が増える、3分診療も無くなるなんて、みんな金持ちの理屈でしかない。それもたった一握りのね。自由診療で競争させれば医療費は下がるなんて、嘘っぱちだったじゃないか。結局、普通の人間はまともな医療が受けられなくなってしまった」

奥さんの上体が動いた。彼は、立ち上がって奥さんの顔を覗き込んだ。そして彼女に異常がないことを確認すると、そのまま腰を下ろして話を続けた。

「一部の恵まれた人達だけが最高の医療を受けられる。みんなが一樣に同じ選択肢しかないなら、諦めがつくんですよ。ところが、そうじゃないから、多くの人間は苦しいんです。あなたも、お母さんを民間病院に連れていけばよかったなんて、思わない方がいい。その方が不幸にならずに済む」

奥さんが急に吐き気を催したらしく、ご主人は、あわてて膿盆を奥さんの口元にあて、背中をさすり始めた。そこにあった光景は、ガン末期の妻を労わる夫の献身的な愛だった。

地中海病院への執着……。

彼の言葉によって、私の中にある怒りのマグマが、地中海病院への執着によって増強されていることを悟った。しかし、取らなかつたもう一つの選択肢を考えないということは、そんなに簡単なこと

ではない。彼の言うことは理屈としては理解できるのだが、私自身の激しい後悔と菊花病院への不満という感情を抑え込むことは不可能であった。

第10話 主治医

ICUのドアが開いて、ぼうぼう頭の医師が入ってきた。今時めずらしいくらいクラシカルな黒ぶち眼鏡をかけた男性医師である。昔のマンガに出てくるガリ勉君を連想させる。白衣のポケットに手をつ込んだままICUの中央にあるカルテ台に近づくと、数冊のカルテを引っ張り出して覗きこんだ。パラパラとめくってパタンとカルテを閉じることを繰り返すと、そのままツカツカとこちらへ向かって来る。もしかして、主治医？ いやな予感。

「日野さんですね。丹羽と言います。今回日野さんの主治医を勤めさせて頂きます。それから、今日はボクが当直ですので」

「よ、よろしくお願いします」

私は深々と頭を下げた。いやな予感はしたが表情に出ないように気をつけた。母の治療をしてもらうのだ。担当医への心象を悪くするわけにはいかない。

頭を下げたときに白衣にぶら下がっている名札の写真が目についた。無表情の顔写真は、少なくとも実物よりも清潔に見える。もう一度、頭を上げて主治医の顔を見る。うつすらと生えた無精髭、薄い唇の隙間から見える歯垢の溜まった歯。私は思わず顔を背けた。

「一応、脳浮腫予防の点滴をしています、まあ、時間の問題ですね。覚悟をしておいて下さい」

耳を疑った。

「一応って、あの、……適当な治療をされたら困るんですけど！」
ここまで何時間も待たされた恨みも手伝って、私の中から完全に理性が飛んだ。こっちは精一杯気を使って接しているのに、この若い医師の不遜な態度は一体何なのだ。思わず唇をかみ締めた私の顔を見て、彼は、答えた。

「ああ、すみません。でも、ボクには何もできませんから。ここでする治療は脳浮腫予防の点滴くらいなんです。これだけ酷い出血だと、どうしようもないというのが正直な意見です」

口先だけの謝罪と、それを裏付けるように自分は悪くないのだという言い訳。明らかに自分よりも年下に見える医師の誠意のない言葉に、私の自制心がかき消された。

「それにしても、もう少し言い様があるでしょう。人の命をどう思っているんですか？」

丹羽医師は何も答えなかった。

しかし、彼の冷たい目が、私に彼の心の内を教えてくれる。

（オレにどうしろ言うんだ。どうしようもないと事実を話しているだけじゃないか。不満があるなら民間病院へ行けばいいんだよ）

彼は私の質問を無視したまま、モニター類を確認して踵を返した。

絶望的な気がした。

ここの病院自体も、そして何より、この医師。

私は彼を追いかけた。彼の前まで大急ぎで走ると行く手を阻んだ。「あんたね。それでも医者なの？ 人の気持ちを踏みにじっておいでタダじゃすまないからね」

自分でもびつくりした。

私は、人から短気だと言われたこともないし、自分でもそう思わない。恐らく、これまでの燻^{くすぶ}りが一気に爆発したのだろう。怒りの中には、地中海病院へ連れて行けば良かったという自分自身に対する怒りも混じっている。そういう意味では八つ当たりと言えなくもないが、構うものか。家族の気持ちまで上手に扱うのがプロってものだ。

丹羽医師は黙っている。斜め下を向いたまま、じっとして動かない。

彼の態度は、私をイライラさせた。

「何とか言いなさいよ！ あんた、仕事したくないんでしょ。私の

母の治療をするのが面倒だと思っているのでしょうか？　どうなのよ！」

ようやく彼は顔を上げて、私の顔を見た。彼の顔からは不遜な表情は消えていた。無表情、と言えいいのか。

「すみませんが、ボクはこれから救急処置室に行くところなんです。ここへは、今日入院された患者さんを確認に来ただけで」

謝罪がない。まずは謝るのが先だろう！

「あんたね。それでも医者？　あんたみたいな人に母を診てもらいたくないわ。主治医替わってもらえないかしら」

一度理性を失ってしまった私はブレーキをかけることができなかった。なっていた。

かろうじて白衣を掴むことはしなかったが、その時、彼のPHSが鳴らなかつたなら、それも自信がない。特別大きな音で着信音が鳴った。

「あ。丹羽です。ああ、すみません。はい。急いで行きます」

よほど彼を追いかけていこうと思ったが、最初にここへ到着した時の、あの救急処置室の騒然とした状況が浮かんできて、ようやく私の理性が目を覚ました。

しかし、担当医は替えてもらおう。あんなのイヤだ。

母の元へ戻ると、例の男性が私を見て言った。

「ここにはいろんな医者がいるよ。患者も色々だけど医者も色々。長いこと入院を繰り返していると、色んな事情が見えてきてね。あなたみたいに何も知らない方がいいかも知れないね」

私は、一部始終を見られていたことを初めて恥ずかしいと思った。

「みつともない所をお見せしてすみません」

男性はニコニコ笑いながら言った。

「いやあ。患者家族だったら、一生懸命になるよ。そりゃあ、あな

たの気持ち、とても理解できますよ。特にお母さんが、こういう状態ならなおさらだ」

一呼吸おいて、彼は医師群の説明を始めた。

「例えば、大久保先生。あの先生は、民間病院に対して敵意を抱いている。彼は、民間病院からの打診があつたのに自ら断つた口だ。面白いねえ、医者っていう人種は。ここにいるより、よっぽど待遇はいいはずなのになあ。おまけに、いつも、国の医療制限について文句ばかり言ってるのに、民間病院へは死んでも就職しないと云っている。生き方が下手って言つのか、青臭いつて言つのか。だけど、そういう先生がいるから、公立病院が、それなりに成り立ってるんだよなあ」

大久保先生というのは、私がここで最初に見た医師、救急処置室で心臓マッサージをしていた、あの先生のことのようなのだ。

「一方で、丹羽先生。彼は、去年、地中海病院の採用試験に落ちた。筆記試験では合格したのに面接試験でダメだったんだとか。かわいそうに、そのすぐ後には、奥さんと離婚」

あれじゃあ民間病院も採用しないだろうよ。離婚より何より、あれで結婚できたことの方が奇跡ではないか。

私は、丹羽医師に対して、必要以上の敵意を抱いているのかもしれない。でも、どうしても、許せないというのか、生理的に受け付けない、というのか。

「医学部をかなり上位で卒業したらしいですよ。不幸なことに、彼のやりたい医療はここにはない。まさか地中海病院を不採用になるとは思っていなかったらしくて、おぼつちや^{こた}ま先生の初めての挫折つてやつです。民間病院不採用と離婚。相当応^{こた}えたみたいですね。早く立ち直ってもらわなくちゃいかなのですかね」

驚くほど病院の内情を把握しているこの情報収集力！ それは、

この男性が、いかに長い時間、ここで奥さんの世話をしてきたかを物語るものでもあった。こんな旦那さんに愛された彼女は幸せだ。でも、丹羽医師がどういう状況にしようと私には関係ない。プロはプロであるべきだ。

彼は続けた。

「まあ、あんまり責め立てるのもなあ。医者も人間だからね。心の病気になることだってあるだろうよ」

正直言つて、私は、この男性に対しても、少し腹が立ってきた。

心の病気なら、仕事を辞めるべきだ。あんな状態で仕事をしてほしくない。私は、誰に言えば担当医を替えてもらえるのか、そのことを真剣に考え始めていた。

第11話 リピート

振り返ってみると、あの時、確かに私の精神状態は普通ではなかった。自分の取った行動がいかに不合理なものであるか、後悔してもしきれないのだが、その時の私には冷静になること自体が不可能だったと言いう方が無い。

私は、一刻も早く、主治医を交替してもらうために、何らかの手立てをたてるべきだと焦っていた。それが、私にできる最善の方法だとは思えなかったのだ。

何のあてもなく、ただ、職員を捕まえられる可能性の一番高い場所は一階だろうという憶測だけでエレベーターへ向かった。事務職員でもいい。看護師でもいい。医師ならもつといい。とにかく私の訴えを聞いてもらわなくては。

一階に下りて、受付窓口へ行く。カーテンが閉まっていた。そう、今はもう夜。カーテンの向こうには明かりが点っていて、南側の扉から人が出入りしているのが見えた。夜間救急患者のために職員は中で働いているのだ。誰か捕まえられないか、私はその出入り口に向かって歩を進めた。

その時だった。私はそこで救急処置室から飛び出してきた丹羽医師を見つけた。かなり急いでいる様子であったが、私にも時間が無い。もう一度、彼に直接クレームをつけてやろうと思った。彼を動かして主治医を今すぐ替えてもらうのだ。もう少し上の先生に直接交渉してもらう。今すぐ。小走りに彼の所へ向かう。

と、一足早く、別の女性に丹羽医師が捕まった。やられた、思った。が、その女性が一瞬こちらを振り返った時、私の背筋に冷たいものが走った。彼女のその顔は、私自身ではないか！ 一体、どういうことだ？ 彼女は、丹羽医師にすごい剣幕で噛み付いていた。「このままじゃ済みませんからね。今すぐ、上級医に掛け合ってください。」

ださい！」

丹羽医師はおろおろしている。彼の手には何か伝票らしきものが握られていた。

大声で怒鳴る彼女を見て、私の中で急速に萎えていく感情があった。悪態をつく醜い彼女（いや、私自身だったのだろうか）を見るのに耐えられず、その場から逃げ出した。

そして、私が逃げた先は、救急処置室の入り口、ちょうど救急搬入口とは反対に当たる東側の入り口であった。

母が運び込まれた時と同じような喧騒が入り口の外まで洩れている。

私は、そつと足を進めた。

ピーツというけたたましいアラームの音が鳴り響き、看護師の叫ぶ声が聞こえた。

「先生！ ^{アレスト}心停止！！ ^{アレスト}心停止！！」

私の右手から左手へ風のように走っていく医師は、私が最初にここで見た、あの大久保医師だ。

彼は患者の胸に両手をあて、すぐさま心臓マッサージを始めた。と、同時に、救急車のサイレンの音が近づいてくるのが聞こえた。

自分が何をしにここまで来たのか、その目的がすっかり頭から抜け落ちた状態で、私はそこに立ち尽くしていた。つい数時間前に見たような光景。デ・ジャ・ヴ？

サイレンが消えた。

扉が開いて入ってきたのは、ストレッチャーに乗せられた患者。性別は分からない。そして、続いて入ってきた家族とおぼしき女性を見て、私は息を呑んだ。その姿は、私ではないか！ 彼女と私は、処置室を挟んで、ちょうど向かい合って立っている。

彼女は、入り口近くの壁際に立ち尽くし、目を丸くして大久保医師の行動を凝視していた。

「ええいつ、くそつ。動け！ 動け！ 動いてくれ！！」

大久保医師は必死で心臓マッサージを続けている。

すると、右側の端にいた看護師さんが大声を上げる。

「先生！ 腹部外傷の患者さん、血圧が下がり始めました！」

私は次の言葉を心の中でつぶやいた。

「80の40です！」

そのつぶやきは完全に看護師さんの大きな声と重なった。

私は驚きで声も出せずにいた。

私と向かい合ったもう一人の私の表情も強張っている。彼女は騒然とした処置室内の慌しい動きに心を奪われ、全然私に気がつかない。私自身も、ここへ来た時のことを思い出そうとしたが、大久保医師と3名の看護師さんの動きしか記憶にない。

私は、いよいよ頭がおかしくなったのか？ 私の中に突然、無数の小さな虫が発生し、一斉にうじゃうじゃと動き回る感じがした。顎までガチガチ音を立てだす。

一体、何が起こっているのだろうか。全く理解できない。

しかし、次の大久保医師の怒鳴り声にはつとした。

「輸血パックはまだ？ 点滴スピードを上げろ！ 丹羽はどこだ？

何やってんだ、全く。全館放送を入れる。救急処置室に至急来いと！」

丹羽医師が手にしていた紙切れは輸血オーダーの伝票か何かに違いない！！

彼は、受付横で、もう一人の私に捕まっている。私は喉がカラカラになってきた。自分が何をしにここへきたか、そんなことはもうどうでもよくなっていた。

丹羽先生、早く、もう一人の私を振り切って、輸血パックを持ってきて！！

血圧の下がり始めた患者が輸血を待っている。それを邪魔しているのが、もう一人の私……

両脚がガクガク震え出したその時、頭上から全館放送が鳴った。

それは、丹羽医師の呼び出しではあったのだが、呼び出し先は救急処置室ではなかった。

「丹羽ドクター、丹羽ドクター、至急ICUまでお願いします」

そして、そのまますぐに続いた呼び出し。

「日野房子様のご家族の方、日野房子様のご家族の方、おられますら、至急、3階集中治療室までお越しください。繰り返します……」

私の胸は早鐘のように鳴った。ただでさえ、パニック状態に陥っているのに、私の脚はガクガク震えて身動きが取れない。

そこで、ぶつつり、私の意識は消えた。

第12話 別れ

「日野さん、日野さん……」

誰かが私を呼ぶ声が聞こえた。

(ここはどこだろう)

目を開けると、若い女性が私を覗き込んでいた。

「私……」

自分がどこにいるのか、最初は理解できずにいた。

頭を動かすと、『受付』の文字が目に入った。暗い病院の一角。やがて、母が倒れたこと、救急車でここ、菊花病院へ運ばれたことを思い出していく。

私が寝かされているのは、待合室のソファの一つだった。

「気が付かれましたか。大丈夫ですか？ どうしますか？ お母様の所へ行けそうですか？」

若い女性が優しく私に問う。よく見ると、CT検査の時に付き添ってくれた、あの若い看護師だ。私服なのでピンと来なかったが。その言葉で、いきなり館内放送の記憶が蘇ってきた。

ICUに來いという放送を聞いた所で私の記憶は途切れたのだ。

私はガバと起き上がって聞いた。

「母は？ 私の母は、大丈夫なんでしょうか？」

何も答えが返ってこなかった。

唇をきゅっと閉じたままの彼女は、困ったような眼を私に向けた。それが意味するもの……

私は天を仰いだ。

涙が幾筋も頬を伝う。

「すみません。いま、母は……どこにいますか？」

力を振り絞って聞く。声がひどく震えていて、私の言葉が聞き取れたか不安になった。

私の手に両手を重ねながら、彼女は、静かに答えた。

「まだ、ICUのベッドの上で、あなたが来られるのを待っています」

私は、ゆっくりと立ち上がった。

「どうも、ありがとうございます。一人で大丈夫ですから」

私に掛けられていた毛布を畳んで礼を言う。

重い足取りでICUへ向かった。

（何をしていただろう。私）

悲しみとも苦しみともつかない、疲れた感情だけが私を支配していた。

ICU内で、母は、眠ったように横たわっていた。口に入れられていた緑のチューブが外されて、頬にはテープの白い屑が残っている。

点滴も外されている。

私は母の胸に上半身を乗せて、泣いた。揺すっても揺すっても母は何一つ反応しない。すでに体温を失いつつある体に触れたことで、一気に母を失ったことを理解していく。

最後の最後になって、私は、残された貴重な時間を母と過ごすこともできなかった。

吐き気に堪えながら、救急車でここまでやってきた時が寧ろ懐かしくさえある。あの時はまだ、物言わぬ母が確かにいたから。

一体、何をしに、こんなに遠くの病院まで来たのだろうか。

こんなことなら、あのまま、自宅に布団を敷いて寝かせていた方がマシだったのかもしれない。救急車に揺られて、遠くまで来て、

医師や看護師とともに話す時間もなく、十分な診察も受けられなかった。そして私は、母が倒れてから、今の今までただただ動揺するばかりだった。

母の胸に顔をうずめていると、看護師がやってきて言った。

「日野さん。大丈夫ですか？ 丹羽医師を呼び出していますから、少しお待ちくださいね」

顔を上げて礼を言う。

「ありがとうございます」

丹羽医師……

不思議と私の中から、彼に対する怒りの感情が消えていた。母を失った悲しみがそれを凌駕していたのか、それとも、あの不思議な体験の所為なのか。

ICU内の時計に目をやると零時半だった。

私が気を失っていたのは、ほんの短い時間だったようだ。

やがて、丹羽医師がやってきた。

彼は、深く頭を下げた。

「力不足で申し訳なく思います。零時7分に確認をさせて頂きました。……ご臨終です」

私は礼を言った。

「どうも、ありがとうございます。それから……、さつきはごめんなさい」

ここで丹羽医師に文句を言ったのは確かである。

一階で怒鳴り散らしていたのが私なのかどうかは、よくわからな
いが……

丹羽医師は、不思議そうな顔をした。

「ああ、いえ。突然だったのでびっくりしましたが、頭を打っていないくて良かった」

??

話がかみ合っていない。

「先生、私が倒れたの、ご存知だったのですか？」

「救急処置室を出たところで、看護師に呼び止められて話している最中でした。突然、救急処置室の前でボタンという音がしたので驚いて……」

……ということは、一階で怒鳴っていたのは、私ではなく看護師？
怒鳴っていたわけではなく、話をしていたのか？

どうも、わからなくなってきた。

「すみません。私、頭が混乱して……。あの、先ほど大久保先生が処置室で診ておられた患者さん、えっと、血圧が下がって輸血が必要な患者さんですけど……」

丹羽医師はパチパチと瞬きをして答えた。

「大久保医師は、今夜は珍しく9時半ごろ、帰りましたよ。それに、輸血が必要だったのは病棟の患者さんだけです」

驚いた。どうも、現実と非現実とがごちゃごちゃになっているようだ。どうせなら、母が倒れたことそのものが非現実の出来事であつたなら良かったのに。

母は旅立ちの準備をしてもらうことになり、その間ICUの外で待つよう指示された。

大慌てで叔父に連絡を入れる。叔父と最後に会ったのは半年前だったろうか。急なことで本当に驚いていた。無理もない。

叔父が手配してくれて、地元の業者の方に迎えに来てもらうことになった。こんな遠くに。3時間後にお迎えが来るそう。恐らく到着は4時前になるだろう。

母は眠ったように穏やかな表情をしている。それが、唯一の救いだった。薄化粧を施されて、照れているようにも見える。

私はただただ、何も役に立てなかったことが悔しかった。

命を救うこともできなかったし、何より最期まで傍にいてやれなかったことが悔やまれて仕方がない。

霊安室に向かう途中、看護師が私のことを気遣ってくれた。

「もう、大丈夫ですか？　ふらふらしませんか？」

この看護師は、私が目覚めた時に傍らにいてくれた、あの看護師（片桐さんというらしい）と同期なのだろう。片桐看護師から私が倒れた状況を聞いたそうで、心底同情してくれた。

片桐看護師が大声で丹羽先生を呼び止めたところで、近くにいた私がよくと救急処置室の方に向かって歩いて行った。片桐看護師は、こんな夜中に救急処置室に何の用だろうと思っていたそうである。彼女は丹羽医師と話ながら、彼の肩越しに見えていた私が処置室の前で崩れ落ちるのを目撃したと言う。

二人は、私の状態を確認した後、私を待合室のソファに寝かせた。その直後に、丹羽医師と私を呼び出す館内放送が流れて、丹羽医師は片桐看護師にその場を任せてICUへ向かったのだそう。

つまり、私を呼び出す放送は実際にあったわけだが、その時、私はすでに意識を失っていたことになる。気を失った状態で夢を見ていたのだろうか。無意識の状態ではあったが聴覚は保たれていて夢に反映されたのかもしれない。

処置室では、もう一人の当直医が救急患者の処置に当たっていたそう。騒然とした処置室の様子を目の当たりにして、私は最初にここへ来たときの光景と混同したのかもしれない。一体どこまでが現実でどこからが夢なのか、その境界がはっきりしない。

さらに、どうも、母の心臓が止まった時刻と、私が気を失った時刻は、ほぼ同時であったようだ。看護師さんがモニターのアラーム音で急変に気づいて、母の状態を確認し、それから丹羽医師を呼び出す放送を流すまで、タイムラグが生じる。おおよそ2、3分。

母が、私を誘導したのかもしれない。それは、（みつともないこ

とをしないで。病院に迷惑をかけないで」という母らしい警告だったのかもしれない。人様に迷惑をかけることを、何より嫌っていたから。

看護師は、ため息を漏らした。

「職員が少なくて、家族のケアまで行き届かないのが現状なんです。本当なら、救急車で到着したら患者さん家族は別の職員がケアすべきなんですけどね。特に、救急現場を、一般の方々の目に曝してしまつのは問題だと思っています。日野さんみたいにショックを受ける家族の方、少なくないんです。病院側には何とかしてほしいと再三お願いしてるんですが、とにかく、公立病院の使命で、できる限り多くの患者さんを受け入れるだけで精一杯なのが現状で……」

小さなコップに、何リットルもの水を注ぎ込もうとしている状態。それが今の日本の医療だ。あふれ出る水は救いようがない。そして、もともと小さすぎるコップに、全ての水をこぼさないようにしろというのが無理な話なのだ。

看護師のため息は、解決策の見えない暗くて大きな闇に向かって吐かれた大きなため息だった。

第13話 執着

母の葬儀に際して、叔父にはとてもお世話になった。諸々の手続きについてもだったが、精神的に私を支えてくれた。

もともと叔父は私たち家族にとつて頼りになる存在だった。そして父が逝ってからその存在感はずっと重みを増した。そうして、今度は、母の死だ。私にはいよいよ頼る人がいなくなって、今回の件では、叔父の存在なしには何一つ物事を進めることができなかったように思う。抜け殻のようになってしまった私を気遣ってくれる叔父の存在は、それだけでありがたかった。

私は、民間病院ではなく、公立の病院、それも遠く離れた菊花病院に搬送してもらったことに、どうしても引つかかりを感じていた。私の悪夢はそこから始ったように思えて仕方がない。もしも、地中海病院にお願いしていたら、もしかしたら、母は助かったかもしれない。その思いは、時間の経過と共に縮小するどころか、ますます私の中で膨らんでいった。

四十九日、叔父がお参りに来てくれたとき、私の心を占領し、私を苦しめ続けているこの思いを叔父に吐露した。

ところが、叔父は、明るい表情で私に言った。

「姉さんは、これで幸せだったと思うよ。知らせを受けたときは、突然のことで本当にショックだったけれど、本人にしてみれば、苦しい期間が短かったただけ良かったんじゃないかな。民間病院に搬送したところで助かったかどうかはわからないし、脳出血だろう？ ひどい後遺症を引きずって生きていくのもつらいものがあるかも知れないよ」

「後遺症が残っても何でも、母さんにはもつと長生きをしてほしかった」

「沙希ちゃんはそのうかもしれないね。本人と家族の思いは必ずしも

一致しないからね。でも、実際に後遺症を引きずっていくのは、その後遺症にもよるけど、沙希ちゃんが想像する以上に残酷だよ。例えば、寝たきり状態で、喋ることもできない、何一つ自分でできない状態になったらどうだろうね。金銭的な問題も発生するよ。今の日本の医療を決していいとは言えないけれど、だからこそ、姉さんの最期は、ボクに言わせたら羨ましい限りだよ。沙希ちゃんは、頑張ったと思うよ。その時に一番いいと思う方法を取ったんだ。何にも後悔する必要はないんだよ」

叔父の言葉は、私の苦しみをゼロにしてくれたわけではないけれど、30%くらいは楽にしてくれた。確かに、一つしか選べないのだ。取らなかつた選択肢についてあれこれ悩むのは決して建設的だとは思わない。それでも、ふっと、母がいない寂しさに押し潰されそうになった時、同じ迷路に入り込む。そして、厄介なことに、それは唐突にやってくる。お茶を飲んでいる時だとか、夕日が悲しいくらいにきれいな時だとか。母の後姿にそっくりなおばさんを見かけてドツキリした後にも。

ついこの間まで、日本では救急車要請も無料だった。家族に不幸が襲った場合、もちろん、経済的な問題がなかったわけではないけれど、少なくとも、今よりはずっと安心して病院にかかることができた。公立病院と民間病院とこれほど激しい格差のある医療体制なんてなかった。医療を受けるために、金銭的なことを勘案しなければならなかったことが、どれだけ患者や患者家族にとって苦痛を伴うか。特に、結果が悪かった時に、家族はひどく苦しむことになる。今更愚痴を言っても仕方がないが、国民皆保険で医療を受けられた時代は良かったと思う。

芸能人や一部のセレブを対象にした「チョイス」と言ったテレビ番組は、余計に、公立病院しか受診できない者を惨めな思いに導く。

「サージェリー」、「ユア・ドクター」、「お訪ねの病院」、「ベスト・ホスピタル」、それらの番組に登場する医師達は、みな、民間病院の勤務医である。特に、「地中海病院」級の、民間病院の中でも超エリート病院は、テレビに出演するドクターを多く抱えている。公立病院にも、大久保医師のように情熱的な医師は存在するのだが、テレビが公立病院の医師を取り上げることはない。メディアにおける公立病院の扱いは、「待たせるだけ待たせてサービス精神のかけらもない最低の病院」という認識である。そこで働く医師達は、メディアに言わせれば、単なる無能集団にすぎない。

そんなテレビ番組に感化されたわけではないのだが、見るともなぐ眺めていた映像に、いかにも俊腕医師といったオーラを放つ民間病院の医師群が登場すると、私の中に、押し込めたはずの「後悔」がむくむくと頭をもたげてくる。今まで興味すらなかったテレビ番組が、母を失ってからやたらに目につくようになった。

わかつているのだ。保険会社がスポンサーの番組。すべては、患者、いや客集めのコマーシャルに過ぎないことを。わかつてはいても、整った最新医療機器、世界最先端の技術、医師を含めた豊富な人材、などを効果的な映像とナレーションで見せ付けられると、胸の奥から突き上げてくる苦しみが私を責め立てるのだ。母が死なずに済んだかもしれない可能性を捨てて、わざわざ遠くの寂れた菊花病院へ搬送してもらった自分の判断能力の低さを嘲笑われているようにうで。

それにしても、あまりにもかけ離れている。私が見た、公立病院、菊花病院の救急搬入口は手動だった。そこからして、テレビに出てくる民間病院と比較することさえ憚られるような違いなのだ。もしも、もしもだけけれど、母が倒れたあの日に戻れるのなら、私は迷わず地中海病院に搬送してもらう。

四十九日を過ぎてから、時々夢を見るようになった。まるで私が

立ち直るのを阻止するかのように。

母さんが倒れたあの日の夢。決まって救急車を呼ぶところから始まる。

救急隊員が到着して聞くのだ。

「希望の病院はありますか」

私は地中海病院と言いたいのに、「菊花病院へ」と答えてしまう。私は自分自身の答えに驚く。ダメ。そこは絶対にダメ。地中海病院。地中海病院。何度も何度も心の中で叫ぶ。そして、いつも、そこで目が覚める。喉を抑えられたような息苦しさに唸りながら目を覚ますと、決まって汗をびっしょりかいている。最近では、夢の途中から、（また、この夢か）と、思うようになった。夢だとわかっていて、やっぱり汗まみれになって目が覚める。

喪が明ける時、気持の整理をきちんとつけていた叔父とは対照的に、私の中に深く根を下ろした後悔の感情が、むしろ喪が明けてから、様々な外部刺激によって叩き起こされていくのを感じていた。

取らなかったもう一つの選択肢への執着。地中海病院、地中海病院、地中海病院……！！

神様。お願いします。無理だとわかっています。

だけど、もう一度あの日に戻して。

母さんが倒れたあの日に……

第13話 執着（後書き）

皆様、ここまで読んでくださいまして、どうもありがとうございます。

さて、そろそろ主人公ももう一つの物語の心づもりができたようです。

『2018年 地中海病院』とタイトルを新たにしていまして、物語を綴っていきます。

4月に入ってからからの投稿予定です。
どうぞ、お楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6668d/>

2018年 菊花病院

2010年10月8日11時58分発行